



2006年2月19日

日本共産党  
北茨城市委員会  
磯原町豊田1030-2  
43-0468(福田)  
42-2462(鈴木)

毎週 日曜日 発行

インターネットでも  
ご覧いただけます。

# 市議会 市立病院特別委員会が 筑波大学に医師派遣の要請

市議会の「市立病院問題特別委員会」による筑波大学への要請が2月9日におこなわれました。日本共産党の福田明議員も参加しました。

当日は、まず鈴木恒夫同

特別委員長から「北茨城市

立病院への医師派遣の要望について」の要請文書が大学側に手渡されました。そのなかで内科・泌尿器科の医師派遣に感謝すると同時に、脳外科の医師派遣を強く要請しました。

これに対して大学側は

「現在は筑波大学自体でも医師を埋める力がない。内科医師についても誰を出すかもまだ決まっていない状況である。北茨城だけでなく、他の病院についても派遣できないところが多い。本当に人がいない。今後、医師派遣は成り立たないのではないか。大学に頼つていればいいという時代ではない」と、きびしい現状が説明されました。なお、市立病院を辞めるさいに「私たち病院にはいられない。いろいろあつて」と語る医

師もいたことが紹介されました。

福田明議員は「筑波大学

にとつて北茨城市立病院の

位置づけ、医師派遣の優先

度はどういふものなのか。

また、医師不足で全国的に

地域医療が深刻な事態に

なっているが、専門家として

打開策をどう考えている

のか」と質問しました。

これに対して大学側の教

授は、市立病院の位置づけ

については明言しませんでした。

地域医療の打開策に

ついては「そんなに簡単に

はいえない」と述べつつ、

「現在、医学部に入る三分

の一は女性だが、夜勤を強

いられるため、結婚すると

一時やめる人が多い。女性

医師をどうとらえるかが重

要。若い人は自分の生活優

先で、昔の『赤ひげ』先生

を期待するのは無理。医師

の都会志向に地方が勝つた

めには、制度の優遇や勉強

になるような特長が必要。

また、環境の整備や医師の

要望をよく聞くことも大切

では」との答えでした。



## 共同運動

労働組合や民主商工会、新婦人の会、農民連など、多くの団体が力を合わせて、住民要求を実現していくと「茨城共同運動」が一昨年に結成されました。当地域でも「県北共同運動」が組織され、2月15日には高萩・北茨城それぞれ市当局との懇談がもたれました。

「心の居場所」づくり講演会が2月14日、教育委員会の主催で開かれ、教師や父母など約50名が参加しました。「友だちができにくい子ども・不登校になりやすい子ども」という演題をみて、「それを一緒にしちゃうの?」とは、不登校経験をもつ一人の中学生の感想です。

## 心の居場所



## 「資源」と「人」を生かす交流

いばらき 県北活性化シンポジウム

2月10日、常陸大宮市で

「県北活性化シンポジウム」

が開かれました。県と(財)

グリーンふるさと振興機構

が主催したものです。

第一部は、作家の立松和

平さんの「私とふるさと」、

および大分県安心院町で農

家民宿を営んでいる中山ミ

ヤ子さんの「楽しみ生きが

いのグリーンツーリズム」

と題する講演がありました

た。

第二部は、茨大の斎藤典

生教授の進行で、ふるさと

県北の各地でさまざまな交



グ改善生活会代表のループ連合会大友さまさん

流を実践している4名によるパネルディスカッション。北茨城市の大友さんも登場して、農村と都市部、子どもたちとの交流について報告しました。

いずれも体験を踏まえてのお話だけに、会場を超過員にした参加者が熱心に耳を傾けました。

大分県の中山さんは、過疎のすすむ町で早くから農家民宿を主宰し、いろいろ端での昔ばなしなどを通じて多くの人と交流を重ねてきました。「ありのままの農家に来ていただくことが私のグリーンツーリズムです。孫や子に負債を残さない取り組みをしています」との話は印象的でした。